

高田家 平士の外出と供揃い

高田家のような平士が日常、どのように外出していたかをイメージするのは簡単です。今日の給与労働者と同様に、平士は毎日家を出て勤務先の、おそらくは城内や街中の事務所に出勤したでしょう。しかし現代の労働者と違い、武士は位別に規定された人数構成の供人とともに移動することを義務付けられていました。

このような家格の主人は、何よりもまず左右どちらかに、僕を従えなければなりません。母屋から外出するにあたり、主人はまず玄関で立ち止まり、その主人をめがけて草履持ちの仲間が草履をさっと投げだします。このように物を「投げつける」ことは、通常では無礼極まりないと見なされますが、武家の作法ではこれは、主人に近づくのは畏れ多いという意思を表現する方法でした。その後仲間とお供が集合し、一団を形成します。これには、着替えの衣装入れを担ぐ挟箱持、家紋のついた槍を持つ槍持、さらに先述の草履取が含まれます。馬の飼育を担当する仲間は、すでに馬に鞍や轡を付け、その傍で主人が乗馬するのを待ち、主人が鞍にまたがるや否や、直ちに行列に加わりました。

こうして高田家のような家格の主人は馬に跨って邸宅を離れ、約 7 名の供人を引き連れて出かけたと考えられています。